



建具は使用される部位により、諸条件が異なり居住性に大きく影響する。それらの条件をふまえて設計・施工する必要がある。伝統的な住まいは一般的に「引戸」が多い。現在のハウスメーカー住宅等では「扉／ドア」が広く活用されているが、その比較は、別項に記載しているため、伝統的な「引戸」を中心にとりあげる。

建具には機能に対応した様々な種類、意匠がある。特に外部建具に関しては、機能とコストの面から一般的にアルミサッシの評価が高く、伝統民家での改修もサッシに交換することが目的化されていることが多い。伝統民家における改修においては、工業製品のアルミサッシ等と伝統的な木製建具等の特質を比較し、適材適所の選択をする必要がある。

●建具の分類

一般的な工事仕様上の分類は①木製建具②鋼製建具③アルミサッシ④木製サッシ⑤特殊建具がある。使用部位により外部建具と内部建具に大別される。

- ①木製建具：自然の木材を加工にした建具を指し、特寸、規格品などある。障子や板戸、格子戸等がある。ガラスだけでなく樹脂板などと組み合わせることもできる。自然乾燥させた木材を使うことが原則。
- ②鋼製建具：ステンレスやコールドテン鋼等の金属製建具を指すが、住宅で使われる頻度は低い。
- ③アルミサッシ：多種多様な製品がある。断熱ガラスとの組み合わせにより外部建具として多用されるが、枠のアルミ素材が熱橋となる。美観よりコスト優先の仕様。
- ④木製サッシ：アルミサッシと木材、木質の性質・性能を一体化した複合型建具で多くはサイズ指定の特注品となる。
- ⑤特殊建具：集成材や木質合成材系、プラスチックなどの樹脂系の建具等を指す。

●建具の材種と意匠

《材種》

伝統民家には工業化以前の建具職人による優れた技巧の建具が遺存する場合がある。改修にあたり補修・調整の上、活用することも可能である。戦前に遡る建具の材種は個々の民家、地域により異なるが、特殊な建具以外はスギ・ヒノキ・けやき・マツ等を軸に選ばれたと思われる。また木部は漆等で塗られている場合もある。再利用も可能なので、各現場単位での対処となる。別項の詳細図資料を参考にされたい。上図は大正期から戦前にかけての建具意匠図を提示したものである。ガラス框戸から格子組み意匠まで採光の機能性と意匠性も加味されている。改修により伝統と現代を調和させるデザイン力も価値創造に不可欠である。

●伝統民家の建具構成

《建具構成》

現住の民家はかなりの部位がアルミサッシに交換されている。農村住宅では現在もなお雨戸＋障子の組み合わせも所在することも確認できる。建具の部位を外部と内部に分けてその種類を略記する。

1. 外部に面す建具：雨戸(板戸)＋障子(水腰・腰板障子)
2. 内部の仕切り建具：障子・板戸・ふすま・格子戸など
3. 特殊部位の建具：格子戸・土戸(蔵等)

これらの建具の種別は限られるが、部位や用途等により素材や意匠を多彩に展開することにより、住まいにおける性能や機能の充実化に効果を発揮することができる。

図：「建具雑型集」建具研究所(1934) 他当時の資料より抜粋